

Toyota City Museum
Of
Local History

豊田市 郷土資料館だより

No.108

目次

拳母城の面影	2
かわはらのみや あち わ じん じゃ 川原宮舘磐神社	3
企画展「スペイン風邪とコロナウイルス」 見どころ紹介	4
100年前の危機 学校を襲ったスペイン風邪 ～企画展「スペイン風邪とコロナウイルス」より～	5
拳母神社の茅の輪くぐり	6
民具調査だより-30 しよつき 鐘馗さん	7
旧豊田東高等学校で 生物調査を行っています	8



拳母神社の茅の輪

拳母城の面影

歯形？のある石材

豊田市美術館敷地内の童子苑西側にある、美術館駐車場の入口付近に、歯形のような痕が残る石材が置かれています（写真1）。



写真1 美術館駐車場の石材

石材は花こう岩で、地上に出ている部分の大きさは、縦約40cm×横約50cm×高さ約35cmです。よく見ると、他の石材には見られない、歯形のような痕が、側面の南西面に二つと南東面に一つ残されています。

石材の由来

実はこの石材、美術館が建設される前に行われた、七州城跡の発掘調査で出土したものです。石材は石垣の根石（石垣の一番下に置かれた石）で、3石が残っていました。石垣石材については、廃城に際して売り払われたという記録が残されており、なぜ3石だけ残されていたかは不明です。

石材に残された歯形のような痕は、「矢穴」と呼ばれる、石材を割る際に掘られ、クサビを差し込んだ穴の痕です。この石材に残された矢穴の大きさは、南西面のものが幅約10cm×深さ約13cm（写真2）で、南東面のものが幅約6cm×深さ約6cm（写真3）です。1石に対して2種類の大きさの矢穴が混在しています。

また、割られた順番としては、先に大きな矢穴を使って割った後に、小さな矢穴を使って石を割っています。

2種類の矢穴

ここでは、石材に残された大きさの違う2種類の矢穴に注目してみましょう。矢穴は、安土桃山時代から江戸時代初頭にかけて石垣を持つ城郭が築かれるようになると、全国で石を割る技術が発達しました。当初の矢穴は幅3～4寸（9～12cm）でしたが、時代が下るにつれ小さくなり、江戸時代中期には2寸（6cm）前後となります。

美術館駐車場の石材に残された矢穴の内、小さいものは幅約6cmであり、天明5年（1785）に一応の完成を見た七州城の石垣を築く際のものの可能性が考えられます。

もう一つの、幅約10cmの大きな矢穴は安土桃山時代から江戸時代初頭に掘られた可能性が高いため、七州城で再利用されたことが想定されます。では、この石材はもともとどこで使われていたのでしょうか。考えられるのは桜城での利用です。矢穴の大きさからは、内藤氏段階ではなく、三宅氏や本多氏が整備をした際の可能性があります。こう考えると、桜城は最初に整備された三宅氏や本多氏の時期から石垣が整備されていたのかもしれない。

桜城址公園に残された隅櫓の石垣にも、幅10cm程の矢穴が一部に見られ、この石垣の石材も転用された可能性が考えられます。

矢穴だけからでは確定的なことは言えませんが、桜城と七州城について石垣の石材が転用されていたことから、三宅氏や本多氏の陣屋の段階に石垣が整備されていた可能性が想定できるようになりました。（市澤 泰峰）



写真2 南西面の大きな矢穴



写真3 南東面の小さな矢穴



かわ はらの みや あち わ じん じゃ 川原宮謁磐神社



御蔵町（足助地区）にある川原宮謁磐神社について紹介します。神社本殿は、令和2年6月に市指定文化財となりました。あわせて、境内にある摂社八幡神社本殿、棟札17枚も附として指定しました。

摂社とは、神社本社とは別に祀られた小規模な神社のことを言います。川原宮謁磐神社の境内には、本殿のほかに拝殿、八幡神社をはじめいくつかの摂社があり、地元の氏神として大切に守られています。



川原宮謁磐神社本殿（覆屋内）と八幡神社本殿（3棟の中央）近景

<由緒>

棟札に記載された由緒によれば、もとは「白鳥大明神」あるいは「川原ノ宮」と称していましたが、南北朝の頃、兵乱によって社殿を失った額田郡阿知和村（現岡崎市）の謁磐神社の神職が、ご神体を供奉して御蔵村に逃れ、明德5年（1394）に白鳥大明神の相殿に合祀して、「謁磐大明神」と称したといえます。

明治2年（1869）に「式内御蔵神社」への改称を旧三河県へ出願したところ、「謁磐大明神」と称することを許され、その後、昭和13年（1938）に由緒に鑑みて現在の「川原宮謁磐神社」へ改称しました。

現在の本殿は、元禄15年（1702）4月9日に建築に着手し、8月15日上棟、翌16年に遷宮を行ったことが棟札によって明らかで、大工棟梁は足助の岩本長八郎久令、葺師は岡崎の廣澤甚右衛門で、この他に村々の肝煎と言われる世話役などの氏名も知ることができます。

<特徴>

川原宮謁磐神社の本殿は、桁行3間（14尺6寸）、梁間2間（9尺4寸）の身舎の前方に三間庇を付した大型の三間社流造です。現在は鉄骨スレート葺の覆屋内に南を正面にして建ち、屋根はヒノキの樹皮を使用した檜皮葺です。

妻面は、虹梁（虹のように弧を描いた梁）を瓶子に似た形の束で支えています。柱上にあって、梁を支える肘木は、先端が鱗状の彫刻を施した独特の形状をしています。破風の部分には、蕪懸魚（蕪の形をかたどっ



川原宮謁磐神社本殿

た妻飾り）を吊っています。

本殿正面の庇と身舎との柱間には、繫海老虹梁（つなぎえびこうりょう）を架け、庇中央部には、手挟（たばさみ）が入っています。この手挟の形状・彫刻・彩色は独特で、足助八幡宮本殿（国指定重要文化財・室町時代中期）と類似しており、当地の大工棟梁がこれを做って復古的に建造したものと考えられます。



川原宮謁磐神社本殿妻見上げ



手挟の様子

八幡神社本殿は、正面に階段が無く、供物などを置く棚を設けた一間社流見世棚造の本殿で、間口5尺、奥行3尺8寸の身舎の前に奥行3尺の庇が付されています。屋根は現在板葺（鉄板覆）ですが、当初は檜皮葺か柿葺であったと考えられます。

このような見世棚造の社殿は一般的に規模が小さく簡素で、造替も容易なことから古い建造物として残り難いなか、この本殿は江戸時代中期の造立当初の形をよく残しています。



八幡神社本殿

いずれの建物も棟札によって上棟年次が明らかであることや造営に係わった大工・葺師・庄屋などの氏名がわかることから、この地方の神社建築の発展を知るうえで貴重な文化財です。（梅村 美紀子）

企画展 スペイン風邪と



コロナウイルス

見どころ紹介



現在、豊田市郷土資料館では企画展「スペイン風邪とコロナウイルス」を開催しています。新型コロナウイルス感染症の拡大にともない、資料館の閉館や企画展の中止・延期を余儀なくされたなかで、現在のコロナウイルス禍における暮らしの記憶を未来に継承しようと、当館学芸員の総力を結集して緊急で企画した展示です。

この展示は市民の皆さんと作り続けていく展示を目指しており、11月29日（日）までの会期中、展示内容を更新しながら開催していきます。ここでは企画展「スペイン風邪とコロナウイルス」の見どころについてご紹介します。



展示室入口を飾る、コロナウイルス関連の新聞で作ったトンネル

過去の記録から読み解く、人類と感染症の歴史

今回の展示では、まず、様々な歴史的な資料から、人類と、ペスト、コレラなどの感染症との関わりを紹介しています。歴史をひも解く中で見えてきたこと。それは、人類の歴史は常に感染症とともにあり、人の命を最も多く奪ったのは、戦争でも自然災害でもなく、実は感染症だったという事実です。

今から約100年前、世界中で猛威を振るったのが、「スペイン風邪」と呼ばれているインフルエンザでした。100年前というと、日本は大正期。展示では、当時の人たちの暮らしを、新聞や学校日誌などで紹介しています。100年前の人たちと、現代の私たち。この展示が、皆さんにとって思いをめぐらせるきっかけとなれば幸いです。

コロナウイルスと私たちの暮らし

日頃、遠い過去のものごとである「歴史」を扱うことの多い郷土資料館ですが、この展示では、(仮称)豊田市博物館のメインテーマの1つである「記憶の収集と継承」の一環として、いま、私たちが経験しているコロナウイルスとの戦いの記憶を集めて展示しています。市民の皆さんの手作りマスクや、市内小・中学校での休校中の児童・生徒たちによる休校中の日記など、身近な暮らしに触れられる展示になっています。

また、6月1日に全国で一斉に打ち上げられた、悪疫退散の願いを込めた花火についてもご紹介しています。

市民の皆さんとともに作り続けていく展示を目指して

新型コロナウイルスの脅威にさらされている現在、100年前のスペイン風邪など過去の感染症から私たちは学び、勇気づけられることが多くあります。もしかしたら、私たちのいまの記憶も、100年先、200年先の未来の人たちを勇気づけられることがあるかもしれません。そんな思いから、会場内では、「コロナの中の暮らしの記憶 2020⇒2120 プロジェクト」と題して、市民の皆さんから現在の記憶を集め、100年先、200年先へ伝えようという取組を行っています。集めた記憶の一部は、当企画展の中で展示し、市民の皆さんと一緒に作り続ける展示を目指しています。皆さんの記憶を、100年先の未来へ残してみませんか。会場に来られなくても、郷土資料館ホームページから投稿することもできます。ぜひご参加ください！

(川辺 知子)

募集

コロナの中の暮らしの記憶 2020⇒2120プロジェクト



募集期間: 11月29日(日)まで

募集内容: ①日々の暮らしに関わる記憶

②仕事に関わる記憶

③学校に関わる記憶

④ステイホームの過ごし方に関わる記憶

募集方法: 会場で「記憶カード」に記入か、郷土資料館ホームページ内のフォーマットに必要事項を入力



Webサイト
こちら

100年前の危機

学校を襲ったスペイン風邪



～企画展「スペイン風邪とコロナウイルス」より～

新型コロナウイルス感染症のために、豊田市内の小・中・特別支援学校は、3月から5月末まで約3か月もの長期間臨時休校しました。では、約100年前の大正7～10年（1918～21）に感染が拡大したスペイン風邪は、当時の本市域の学校にどのような影響を及ぼしたのでしょうか。各学校に残る記録から、当時の状況を探ってみました。11校の学校沿革誌、2校の学校日誌、4校の周年記念誌にスペイン風邪・流行性感冒等の記録が残っています。

内容は、臨時休校（休業）とその期間、感染者数または亡くなった児童の氏名、行事の中止、スペイン風邪の症状、予防に関する記述など多岐にわたっています。中には、約200名の児童（42%）が感染した学校の記録も残っています。これらの記録から、当時の学校現場での緊張感が伝わってきます。展示では、関係する学校の沿革誌、大正7年度の卒業写真、学校日誌などを展示しています。

豊田市域だけでなく日本全国に残されている記録が、現在のコロナウイルス感染症対策の参考になっていることは間違いありません。およそ3か月間の臨時休校をはじめとする様々な対策で、児童生徒への感染を防いでいたことは、まさに「100年前の歴史に学ぶ」成果と言えるのではないのでしょうか。

本企画展にぜひ足をお運びいただき、過去に学び、また現在のコロナウイルスの中の生活の様子を次世代につなげていきましょう。
(伊藤 俊満)



【スペイン風邪の記録が残る16の学校】



【加納小学校沿革誌】

拳母神社の茅の輪くぐり

皆さんは、「茅の輪」をご存じでしょうか？

茅の輪は、茅や藁などを束ねて輪状にしたもので、多くは6月末の大祓と呼ばれる行事の際に作られます。この茅の輪をくぐることで、無病息災や厄除けを祈願することができるといわれています。茅の輪の由来は諸説ありますが、蘇民将来（スサノオとも）という神が、茅の輪を腰につければ疫病を避けることができると教えた逸話が残っています。この時期に行われる疫病除けの祭礼として有名なものに、京都の祇園祭が挙げられます。

豊田市内では、猿投神社や松平東照宮、糟目春日神社などで茅の輪くぐりが行われています。今回は、7月24日に行われた拳母神社の茅の輪づくりを紹介します。

まずは茅を刈るところから…

朝4時半、拳母神社の氏子の皆さんが茅場に集まり、茅の輪に必要な茅を刈り取ります。茅は、刈り取った時から、だんだんと青から茶色に色が変わっていくため、作るその日に刈り取らなければなりません。刈り取った茅は、ある程度のまとまりで束ねます。



茅の輪づくり

刈り取った茅を、拳母神社まで運び、茅の輪づくりにとりかかります。

まずは、刈り取った茅を一本一重点検し、根本部分のゴミを取ったり、茶色になっている表皮を剥がしたりして、整え



ていきます。

その間に、茅を括り付ける鉄の枠を用意します。直径2m程の枠に、きれいに整えた茅を巻き付けていきます。

茎の部分が葉の緑の部分で隠れるように、うまくずらしながら、茅の束を巻き付け、輪にしています。



全体に茅を巻き付けたら、両脇に切った竹をくくり、輪の上部に紙垂を付ければ完成です。

完成した次の日に、神事を行い、参拝者の方々がくぐるようになります。

拳母神社の茅の輪くぐりは、平成20年から始まり、例年、豊田おいでんまつりのフィナーレである花火の前日に合わせて行われています。今年は、豊田おいでん祭りの全行事が新型コロナウイルス感染症の影響で中止となってしまいましたが、無病息災・厄除けを願い、今年も行うことに決めたとのことでした。

来年は、新型コロナウイルス感染症の影響が落ち着き、再びお祭りなどの年中行事が人々にぎわうようにと祈りながら、茅の輪をくぐった筆者なのでした。
(名和 奈美)





民具調査だより-30

しょうき
鍾馗さん

本紙 No.89 で「屋根にあがった鍾馗さん」と題して、市民の方の問合せにお答えするという形で、鍾馗像についての報告を行いました。今回は、神仏を守護神とする私たちの気持ちがどのような絵や像を生み出したかを見てみたいと思います。

鍾馗さんは、中国の民間伝承に伝わる道教系の神様で中国の官人風の衣裳をまとい、手には剣を携えた髭面の大男です。中国で悪霊や邪鬼を祓う守り神として信仰されていたものが、日本では平安時代末の『避邪絵』に始まり、以降痘瘡除けや学業成就、端午の節句に飾る武者人形に造形化されました。

瓦製の鍾馗像には、右手に剣を持つ鍾馗さん単独の立像と小さな鬼を左手でつかんだり、足で踏みつけている姿のふたつの様式があります。ここに登場する小鬼が、玄宗皇帝が病の中で見た夢に登場する悪さをする鬼“虚耗(漢読みでキョコウ)”で、鍾馗さんにパクリと食べられてしまっています。

(東海民具学会 岡本大三郎)



鍾馗さんの掛軸



本紙-W433 H1280 個人蔵

端午の節句飾り / 鍾馗の幟



W1110 H1610
足助・田口家收藏品

『避邪図』加藤紫軒
明治二十八年生(没年は不明)
碧海郡高須町(刈谷市)生まれ。

瓦製の鍾馗さん / 踏みつけられる虚耗



背面が垂直に切り落とされている「棟用壁掛け」タイプの製品。W236 H348 D112

豊田市足助資料館收藏品



鬼瓦の前に鎮座する鍾馗さん。豊田市足助町田町、旧白要さん宅。

旧豊田東高等学校で生物調査を行っています

博物館の建設に向けた旧豊田東高等学校の解体工事が、8月から本格的にはじまりました。工事前の自然環境の状態を記録するため、郷土資料館（博物館準備室）では、自然観察の森、矢作川研究所、自然愛護協会、野外センターの有志の方とともに、敷地内の植物、昆虫、ほ乳類を主な対象とした生物調査を行っています。新博物館では、自然観察や散策といった活動ができる庭を整備していく予定ですが、今回の調査結果は、今後の整備を進める中で、具体的にどのような環境を作っていくべきかを検討していくための有益な情報となります。

さて、市街地の中心部、しかも学校という人工的な環境にはどのような生物たちが生息しているのでしょうか。まだ調査の途中ではありますが、活動の中で確認された生物の一部をご紹介しますと思います。

（酒井 博嗣）



ホンドタヌキ（骨）

校舎の裏側で白骨化した個体を発見しました。死体ではありませんが、街の中心部にも生息していることがわかりました。



ナガサキアゲハ（雄）

南方系の蝶で、近年分布が北上しています。敷地内の蝶類は、鳥に羽根をかじられた個体をよく見かけました。



センチコガネ

いわゆるフンコロガシの仲間です。大型の哺乳類がない街中では、どのような動物の糞を利用しているのでしょうか。



タイワンタケクマバチ

中国大陸原産の外来種です。枯竹に巣をつくる習性があります。敷地周辺に竹林があるためか、調査中によく姿を見かけました。



発見！卵泥棒

コチドリのの巣をカラスが襲撃している様子を偶然捉えました。街中での営巣は、敵も多く大変そうです。



キリ（花）

昔は女の子が生まれるとキリをを植え、嫁入りの際にその材での簞を作ったそうです。敷地内に多いのは女子校の名残でしょうか。

豊田市郷土資料館利用案内

開館時間 午前9時～午後5時
休館日 毎週月曜日（祝祭日は開館）
入館料 無料（特別展開催中は有料）
交通案内 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分
名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分
愛知環状線「新豊田駅」より 徒歩15分
とよたおいでんバス「陣中町一丁目」より西へ 徒歩5分
駐車場 約20台

豊田市郷土資料館だより No.108

令和2年9月18日発行
編集・発行 豊田市郷土資料館
〒471-0079 豊田市陣中町1-21-2
TEL.0565-32-6561 FAX.0565-34-0095
E-mail rekihaku@city.toyota.aichi.jp
URL <http://www.toyota-rekihaku.com>
FB <http://facebook.com/toyotarekihaku>
豊田市郷土資料館だよりは、HPでもご覧いただけます。